

対人関係の様相が対人認知カテゴリに及ぼす効果

弓 削 洋 子

(キーワード：対人認知カテゴリ，内容分析，相互依存性)

1. 目的

この研究では，対人認知において，対人関係の様相が認知の際に使用されるカテゴリをどのように規定するか，検討することを目的とする。

対人認知とは，人についての知識内容及び知識形成過程やその手段の総体である。社会心理学における対人認知研究は，対人認知から対人行動を予測することを目的に，第一に，対人認知の内容全般のカテゴリ分析，第二に，人を認知する際に使用するカテゴリを規定する条件の検討，第三に，対人認知カテゴリと対人行動との関連の検討を課題としてきた（Hastorf, Richardson, & Dornbusch, 1958）。

第一の課題である，対人認知内容を構成するカテゴリの分析については，Beach & Wertheimer (1961) が，人についての説明内容を対人認知内容の指標とし，どのようなカテゴリによって説明内容が構成されているか身の回りの人物に関する自由記述の内容分析をした結果，記述内容は，外見や人口統計学的情報に該当する「客観的情報」，対象人物の（被験者も含めた）まわりの人々への態度やまわりの人々からの態度に該当する「社会的相互作用」，性格特性や自己概念及び価値観に該当する「行動の一貫性」，能力や動機づけまたは興味に該当する「業績・活動」の，4つのカテゴリのいずれかに分類できることを示した。この結果は，対人認知内容を分析するカテゴリを明らかにしたもののといえる。

第二の課題である，認知の際に使用されるカテゴリを規定する条件については，認知する側と認知される側との相互作用や対人関係が認知を規定する条件として検討されている。Campbell & Yarrow (1961) は，いたわりや反応のよさなど仲間が求める行動がとれて人気者の子どもは，仲間から好かれていない子どもに比べ，仲間を説明する際に仲間の性格特性や動機に関する内容を言及する率が高いことを示している。相互関係にみられる好悪は，対人関係の親密さといえるが（Newcomb, 1960），Campbell & Yarrow (1961) の結果は，認知する側と認知される側との相互関係が親密であるとき，相手の性格特性や動機の内容を主に認知することを示している。認知者と認知対象者との相互関係の親密さといった対人関係の様相が，他者を説明する際使用するカテゴリを規定することを示唆する結果といえよう。対人関係のどのような様相が人を認知する際に使用するカテゴリを規定するかの検討が，対人認知研究の課題として提起される。

しかし，Campbell & Yarrow (1961) 以降，対人認知研究において，Beach & Wertheimer (1961) の認知カテゴリのうちどのカテゴリが使用されるか規定する条件として対人関係の様相を実証的に検討したものはない。学童期の前期から青年前期に向かう加齢を条件として実証した研究（Livesley & Bromley, 1973；Peevers & Secord, 1973；村山, 1977），Beach & Wertheimer (1961) の「行動の一貫性」カテゴリに該当する性格特性の認知構造を明らかにした研究（Rosenberg, Nelson, & Vivekananthan, 1968；Norman, 1963；Passini & Norman, 1966；林, 1978），性格特性が認知される過程の理論化（Heider, 1944；Heider, 1958；Jones & Davis, 1965；Kelley, 1967），あるいは，外見や年齢，所属集団など「客観的情報」に該当する情報と性格特性認知との関連（Brewer & Lui, 1989；Brewer, Dull, & Lui, 1981；Fiske, Neuberg, Beattie, & Milberg, 1987）に焦点がおかれている。

対人認知研究において，性格特性の認知に焦点があたる背景として，研究の方法上，Asch (1946) の印象形成の実験のように，実験者が先験的に性格特性を表す尺度を選択して，認知する側に呈示して評定させることが考えられる。一方で，対人認知研究において実験者が呈示する評定項目が含まれるカテゴリと，自由記述や面接法によって抽出された，被験者（認知する側）が人を説明する際に使用するカテゴリとの重複度は，自由記述と面接法とで同一被験者が使用したカテゴリの重複度よりも低いことが示されている（Oswalt, 1974）。この結果からは，認知する側は実験者が呈示しないカテゴリを使用して人を認知しうることがいえる。認知する側が使用するカテゴリを規定する条

件を検討するうえでは、自由記述や面接法によって被験者（認知する側）に対象人物について説明させて、人を認知する際に使用するカテゴリを把握することが必要である。

弓削（1994, 1996）は、親密な相互関係が含まれる、課題解決上互いに相手を必要としあう相互依存性の高い関係において、相手を説明する際、Beach & Wertheimer（1961）の「行動の一貫性」及び「業績・活動」に相当する「心理的側面」カテゴリに関する説明が多いこと、その相手との関係が、疎遠な、互いに相手を必要としない相互依存性の低いものになると、他者の外見など「客観的情報」カテゴリに関する説明が多くなることを示した。対人関係の相互依存性が高いとき、「心理的側面」に関するカテゴリを使用して人を認知すること、相互依存性が低いとき、「客観的情報」に関するカテゴリを使用して人を認知することが示唆される。

転じて、対人関係の様相に注目すると、相互依存性の高い関係と低い関係は、いずれも、自分にとっての相手の必要性和相手にとっての自分の必要性和が一致している関係にある。対人関係を評価する特定の次元上、相手への自分の評価と自分への相手の評価とが一致する相互性（Tagiuri, 1958）がみられる関係といえる。その一方で、相互性（Tagiuri, 1958）がみられない対人関係として、依存関係が挙げられる。依存関係は、自分（相手）が相手（自分）を一方向的に必要とする関係である（e.g., Bennis & Shepard, 1956；廣田, 1958；楠見・狩野, 1986）。

依存関係にあるとき、相手を認知する際に使用するカテゴリは何か検討した研究はない。Tjosvold & Farbreay（1980）の意思決定場面の実験では、同組になった相手との関係として、相互依存性の高い関係に相当する相互依存条件、相手への依存条件、相互依存性の低い関係に相当する独立条件、以上3条件を設定して、相手の意志や考えについて知りたいか評定させた。その結果、独立条件に比べ、相互依存条件と依存条件のほうが相手の意志や考えを知りたいと評価すること、相手と対面する機会がある状況では、依存条件に比べて相互依存条件のほうが相手の意志や考えを知りたいと評価する結果が示された。相互依存性の高い関係において、他の2つの関係に比べて、相手の意志や考えといった「心理的側面」を知りたいこと、相互依存性の低い関係において、他の2つの関係に比べて、内的側面を知りたいと思わないことが示されたが、依存関係にあるとき、相手のどのような情報を知りたいかは示されていない。

但し、個人が持つ対人関係形成のパタンである愛着型が、未知の人物との関係形成に及ぼす効果を検討したBaldwin, Keelan, Fehr, Enns, & Koh-Rangarajoo（1996）の実験から推測することができる。Baldwin et al.（1996）は、異性と親しくなりたい人物を被験者として、3名の未知の異性の情報として、人口統計学的情報や人とのつきあい方に関する情報など、様々な情報を提示し、その後に各人物への魅力を評定させた。その結果、自分が知りあいとの関係において期待することや信念といった愛着型と一致するつきあい方をおこなう人物に対し、魅力を高く評価することが示された。Baldwin et al.（1996）の被験者がおかれた状況は、自分は相手と親密になりたいが、親密関係の形成は相手次第である、相手に依存する関係と解釈できる。このとき、相手についての様々な情報のうち、どのようなつきあい方を人とおこなうか、相互作用に関する情報を重視することが結果から読みとれる。依存関係にあるとき、まわりの人々への態度やまわりの人々からの態度といった「社会的相互作用」（Beach & Wertheimer, 1961）のカテゴリに該当する内容から相手を説明することが予想される。

自分が相手に依存する関係に対し、相手が自分に依存する関係における対人認知については、推測できる研究はない。但し、依存される側からみれば、相手が自分に一方的に働きかけてくるとき、自分は相手にどのような態度・相互作用をとろうとするか考えると思われる。自分が相手に依存する状況同様、相手の行動を、自分に対する相手の態度や相手への自分の行動といった、自分と相手との相互作用に関する情報から説明するであろう。したがって、自分が相手に依存する・依存されるといった、自分の立場が変わっても、自分と相手との関係が依存的であるとき、「社会的相互作用」（Beach & Wertheimer, 1961）のカテゴリに該当する情報を相手に認知することが予想される。

以上より、他者についての言及を他者認知の指標とすれば、第一に、自分と相手とが相互依存性の高い関係にあるとき、相手について「心理的側面」カテゴリに該当する言及を、相互依存性の低い関係にあるとき相手の「客観的情報」カテゴリに該当する言及を、依存関係にあるとき相手の「社会的相互作用」カテゴリに該当する言及を主にすることが予想される。第二に、依存関係において、自分が相手に依存する状況と相手が自分に依存する状況とでは、いずれも相手について、「社会的相互作用」カテゴリに該当する情報を主に言及することが予想される。

2. 方法

被験者 大学生及び大学院生15名である（男性4名、女性11名、平均年齢21.1才、標準偏差1.44）。

調査期間 2006年4月～7月までである。

手続き

1) 予備調査

対人関係の様相として、相互依存性の高い関係、相互依存性の低い関係、依存関係（自分が相手に依存、相手が自分に依存）、計3様相に対応する具体的な対人場面を設定するために、被験者である大学生・大学院生がふだん経験しうる対人場面のなかから各様相に対応する場面を、調査者が予め15場面選択し、各場面の経験の有無を大学生10名に質問、10名中9名以上経験したことがある14場面を選び出した。次に、各場面について、大学生3名に、関係の相互依存性の高低、依存の方向性（自分と相手の双方か、一方か）を評価してもらった。その結果に基づいて、被験者自身の行動に対し、相手やまわりの人が何らかの反応をしめす状況のなかから、相互依存性の高い関係の場面、相互依存性の低い関係の場面、依存関係の場面（自分が相手に依存する場面）を選定した。

2) 本調査

予備調査の結果に基づいて本調査では、対人関係の3様相の条件として、以下の場面を設定した。

- ① 相互依存性の高い関係場面：被験者がゼミで発表している際に同級生・教員から質問・意見されるとき
- ② 相互依存性の低い関係場面：被験者が電車に乗ろうとして人混みをかきわけてホームを歩いているとき（あるいは、目的地に向かって、地下道や大通りなど人混みのなかを歩いているとき）
- ③ 依存関係場面（自分が相手に依存する場面）：しばらく会っていなかった中・高校・大学時代の知人に、被験者のほうから、同窓会の連絡など用事がある、電話・メールするとき

さらに、上記の3場面に、「相手が自分に依存する場面」も設定した。依存関係のうち、自分が相手に依存する関係と相手が自分に依存する関係とは相手を認知する際に使用するカテゴリが異なるか検討するためである。従って、被験者が質問される対人場面は計4場面である。

- ④ 依存関係場面（相手が自分に依存する場面）：しばらく会っていなかった中・高校・大学時代の知人から、被験者に同窓会の連絡など用事で、電話・メールが来たとき

上記の各対人場面に関する面接調査と質問紙調査を実施した。

被験者には、ふだん体験する対人場面について、大学生(大学院生)は一般的にどのような行動をとったりするか、広く把握するための調査であると教示し、面接内容のカセットテープレコード録音の了承を得てから、調査を開始した。

面接調査では、場面ごとに、場面の経験があることを確認してから、①場面の詳細（被験者や相手・まわりの人がおこなったことなど）、②その際に、被験者が思ったこと・考えたこと・感じたことを自由に話してもらった。調査者は非指示的態度で被験者の話を聞くようにした。

各場面について話してもらったあと、質問紙に回答してもらった。質問項目は、各対人場面でみられる対人関係を形成・維持するうえで自分及び相手が必要である程度を聞く内容である。①被験者はどの程度相手が必要だったか、②相手はどの程度被験者を必要だったと思うかについて、7件法で評定してもらった。最後に、性別と年齢について記入してもらい、調査の意図を説明して、終了した。

話してもらおう対人場面の順序は、依存関係の2場面は連続して聞くように配置したが、あとはランダム順に聞いた。但し、話が出にくい場合は、他の場面を先に聞くよう変更した。

3. 結果

カテゴリ分析 相手またはまわりの人々についての言及を他者認知の指標とした。言及内容を、一つの意味のみを含む単位に区切り、弓削（1994）の対人認知カテゴリを修正したものに分類した。

カテゴリは、「客観的情報」、「社会的相互作用」、「心理的側面」の3つに分かれ、各カテゴリはさらにサブカテゴリに分かれている。

カテゴリの詳細は以下の通りである。

I. 客観的情報 相手の物理的・身体的特徴や、物理的・身体的特徴に注目した言及。また、物理的対象と同様、考えや意志などの内的側面がないものとして、相手の内的側面を無視した・考えない言及もここに含まれる。

I-1. 物理的・身体的特徴、社会制度上の地位・所属（職業・学歴等）

客観的に判断できる情報。プロフィール。

例：外見，家族構成，出身地，所属集団（家族，所属校），年齢，性別。

I-2. 内的側面を無視した言及

相手が主体的に行動することを想定していない言及。他者に対して「どけ」「押すな」といった言及は、障害物やモノと同様、一方的に相手を自分が操作する態度なので、ここに入る。

例：「まわりをみろ」、「どけ」、「押すな」、「動け」、「じゃま」

I-3. 内的側面を考えていない言及

相手の意図や考え、感情などを感じていない、気にならないことを直接言及したもの。

例：「特に相手に何も感じない」

II. 社会的相互作用 自分と相手との関係や相互作用においてどのような感情・評価を伴うか、どのような反応が期待されるか言及された内容がここに含まれる。

II-1 自分(+他の人々)に対する相手の働きかけ・態度

相互作用における、自分への相手の行動や態度、自分との関係や相互作用についての相手の評価。

例：「私にお金を貸してほしいのかな」、「私を頼ってくれたようだ」、「私にやさしい」、「その人は道順を教えてくださいそうだ」、「私と話してよかったと彼は思っている」。

II-2 相手に対する自分(+他の人々)の働きかけ・態度

相互作用における、相手への自分の行動や態度、相手との関係や相互作用についての自分の評価。

例：「彼女の声が聞けて懐かしかった」、「相手を不信に思う」、「彼に会えて嬉しい」

II-3 自分(+他の人々)と相手、相互的な働きかけ・態度

相手と自分との相互作用における、相手と自分との相互的な働きかけ・態度、二人の関係や相互作用についての相手と自分の評価。どちらがどちらに対してとはいえないものが該当する。

例：「彼女と助け合った」、「お互い気まずくなった」、「久しぶりに会って、お互いよかったと思う」

III. 心理的側面 相手の性格特性や考え方、意欲、信念、能力とされる内的側面についての言及。また、内的側面が気になる、理解しようとする言及。相互作用の結果、相手の性格特性や考えに注目した言及も、注目しているのは相手の性格特性や考え方なので、このカテゴリに入る。

III-1 性格特性、能力、知識

人に一貫してみられる行動特性や能力、知識。また、相互作用の結果、相手の性格・能力・知識について理解できた言及はここに入る。

例：「その問題を彼は解ける」、「いい人」、「あの人だったら知っている」、「(会ってみたら) 明るい人だった」

III-2 行動の意図、姿勢、自己評価

相手の行動の意図、考え方、価値観、自己概念に関する言及。意図や考え方がどのようなものか具体的に言及していなくても、「どんなことを考えているのだろう」等、考えに注目している言及はここに入る。

例：「彼女はどんな意見なのか」、「彼の言っていることは難しかった」、「～さんの発言はわかりやすい」、「(彼女の説明を聞いて) なんとなく研究内容がわかった」

III-3 意欲、要求、感情

相手の意欲、要求、感情に関する言及。但し、自分と相手との相互作用への評価、その際起きる感情などは、「社会的相互作用」カテゴリに入る

例：「彼女はがんばっていた」、「彼は早く降りたかったようだ」

第三者である判定者一名と調査者とのカテゴリ分類の一致度は95%であり、カテゴリの信頼性が高いことが確認された。

各対人関係様相に対応する対人場面設定の操作チェック まず、各対人関係様相に対応した対人場面における関与度を確認するために、対人場面ごとに、関係を形成する際に相手の必要度評定値と相手にとっての自分の必要度認知とを合算して指標とし、欠損値のあった3ケースを除き、対人関係様相要因(3条件：相互依存性の高い関係、相互依存性の低い関係、依存関係〔自分が相手に依存する状況〕)の一元配置分散分析(級内)をおこなった。その結果、有意であり($F_{(2,22)}=50.2, p<.001$)、多重比較の結果(*HSD*)、相互依存性の高い関係($M=11.2$)、依存関係($M=9.08$)、相互依存性の低い関係($M=3.08$)の順に関係への関与度が高いことが示された。

次に、各対人関係様相に対応する対人場面の相互性(Tagiuri, 1958)を確認するために、様相ごとに、自分が相

手を必要とする程度の評定値から相手が自分を必要とする程度の評定値を差し引いた値を指標として、欠損値のあった3ケースを除き、対人関係様相要因（3条件：相互依存性の高い関係、相互依存性の低い関係、依存関係〔自分が相手に依存する状況〕）の一元配置分散分析（級内）をおこなった。その結果、有意であり（ $F_{(2,22)}=8.78$, $p<.01$ ）、多重比較の結果（*HSD*）、相互依存性の高い関係（ $M=.667$ ）、相互依存性の低い関係（ $M=.250$ ）に比べ、依存関係（ $M=1.92$ ）にあるとき、評定値が高いことが示された。自分が相手に依存する関係において、相手が自分を必要とするよりも自分が相手を必要とすることが確認された。また、関係への関与度の結果と併せてみると、相互依存性の高い関係場面において、互いに必要としあう程度が高いこと、相互依存性の低い関係場面において、互いに必要としあう程度が低いことが確認できる。

さらに、対人関係のうち依存関係として、相手が自分に依存する場面と依存される場面との2場面を設定したが、各場面における相手への自分の依存、自分への相手の依存を確認するために、自分が相手を必要とする程度、相手が自分を必要とする程度、それぞれを指標として、相手が自分に依存する場面と自分が相手に依存する場面とで平均値の差の検定をおこなった。いずれの指標においても有意差が認められ、自分が相手に依存する場面のほうが（ $M=5.50$ ）、相手が自分に依存する場面よりも（ $M=3.42$ ）、自分は相手を必要であるとみなし（ $t_{(11)}=2.97$, $p<.05$ ）、相手が自分に依存する場面のほうが（ $M=5.00$ ）、自分が相手に依存する場面よりも（ $M=3.58$ ）、相手は自分を必要であるとみなす（ $t_{(11)}=3.26$, $p<.01$ ）結果となった。以上の結果から、各対人関係様相に対応する対人場面設定の操作が確認された。

各対人関係様相におけるカテゴリ使用頻度 各対人関係の様相に対応する対人認知カテゴリを検討するために、言及を区切った単位が各カテゴリに分類された回数をカテゴリ使用頻度とし、他者認知の指標とした（Table 1 参照）。但し、頻度の分布がポアソン分布に近かったので、分散分析の際には使用頻度の開平変換値（ $\sqrt{X}+\sqrt{X+1}$ ）を使用した。対人関係様相要因（3条件：相互依存性の高い関係、相互依存性の低い関係、依存関係〔自分が相手に依存する状況〕）×対人認知カテゴリ要因（3条件：客観的情報、社会的相互作用、心理的側面）の2要因分散分析（全て級内）をおこなった結果、対人関係様相要因の主効果（ $F_{(2,28)}=13.2$, $p<.001$ ）、カテゴリ要因の主効果（ $F_{(2,28)}=7.38$, $p<.01$ ）、交互作用（ $F_{(4,56)}=90.8$, $p<.001$ ）が有意であった。単純主効果検定及び多重比較（*HSD*）をおこなった

Table 1 対人関係の3様相における対人認知カテゴリの使用頻度（平均値）

対人認知カテゴリ	対人関係様相		
	依存	相互依存・高	相互依存・低
客観的情報：身体的・物理的特徴，“モノ”扱いの言及	1.20 (1.21) b	> 0.07 (0.26) c	< 2.73 (0.96) a
社会的相互作用：他者への自分の態度・評価、自分への他者の態度・評価	4.13 (1.19) a	> 1.67 (0.90) b	> 0.00 (0.00) b
心理的側面：性格特性、考え・意志、感情	0.33 (0.62) c	< 3.87 (1.41) a	> 0.33 (0.62) b

注1) カッコ内：標準偏差 注2) 使用頻度の分布がポアソン分布に近かったので、計算の際には開平変換値を用いた。

注3) アルファベットは対人関係様相ごとの多重比較（*HSD*）の結果である（異なるアルファベット間に有意差あり [$p<.05$]）。不等号は対人認知カテゴリごとの多重比較（*HSD*）の結果である（ $p<.05$ ）。

Table 2 依存関係における自分の立場ごとの対人認知カテゴリ使用頻度（平均値）

対人認知カテゴリ	依存関係における自分の立場		平均
	自分が相手に依存する	相手が自分に依存する	
客観的情報：身体的・物理的特徴，“モノ”扱いの言及	1.20 (1.21)	0.73 (0.70)	0.97 (1.00) b
社会的相互作用：他者への自分の態度・評価、自分への他者の態度・評価	4.13 (1.19)	3.53 (1.13)	3.83 (1.18) a
心理的側面：性格特性、考え・意志、感情	0.33 (0.62)	0.33 (0.62)	0.33 (0.61) c
平均	1.89 (1.93)	1.53 (1.66)	1.71 (1.80)

注1) カッコ内：標準偏差 注2) 使用頻度の分布がポアソン分布に近かったので、計算の際には開平変換値を用いた。

注3) アルファベットは対人認知カテゴリ主効果の多重比較（*HSD*）の結果である（異なるアルファベット間に有意差あり [$p<.05$]）。

結果、相互依存性の高い関係において、「心理的側面」カテゴリに該当する内容が多くみられた。例えば、「(自分の発表内容に対して) 相手はどんな意見・質問するのだろうか」、「先生の視点はすごい・よく知っているなあ」、「同級生がこんなことを考えていたとは」など、自分の発表に対するまわりの人の意見や考えに関する言及が主であった。相互依存性の低い関係においては、「客観的情報」カテゴリの使用頻度が他のカテゴリに比べて多いことが示された。例えば、「じゃま」、「人が多いな」といった、まわりの人を障害物とみたり、人数といった物理的特徴に注目した言及が主であった。これらの結果は、弓削(1994, 1996)と一致する結果といえる。依存関係においては、「社会的相互作用」カテゴリの使用頻度が他のカテゴリに比べて多く、Baldwin et al.(1996)からの推測と一致する結果となった。例えば、「ちょっと会いたいなあ」、「遊ぶ約束をしたい」、「相手から断られないかな」など、自分は会いたい・連絡したいが、相手は自分の働きかけにどう反応するか気にする言及が多かった。

次に、依存関係において自分が依存する・依存される、いずれの立場かによって、相手の認知の際に使用するカテゴリが異なるか検討するために、依存関係の立場要因(2条件:自分が相手に依存する場面、相手が自分に依存する場面)×対人認知カテゴリ要因(3条件:客観的情報, 社会的相互作用, 心理的側面)の2要因分散分析(全て級内)をおこなった。その結果、対人認知カテゴリ要因の主効果のみ有意であり($F_{(2,28)}=96.4$, $p<.001$), 依存関係の立場要因, 交互作用とも有意ではなかった(順に, $F_{(1,14)}=1.35$, $n.s.$; $F_{(2,28)}=.48$, $n.s.$)。多重比較(HSD)の結果、「社会的相互作用」カテゴリが他のカテゴリよりも使用頻度が高いことが示された(Table 2)。自分が依存される・依存する、いずれの立場であっても、相手との関係が依存的であるとき、相手と自分との関係性や相手への好悪・評価から相手の行動を説明するといえる。但し、自分が相手に依存する場面においては「連絡をとりたい・とらないといけない」「相手は会ってくれるか・電話に出ってくれるか」など、自分の働きかけに対する相手の反応が気になるのに対し、相手から依存される場面においては、「何で私に電話してきたの」、「連絡くれてうれしい」、「(誘いに対し) どうやって断ろうかな」など、相手が自分に何を期待しているか考えながら、相手にどう対応するか考える内容が多かった。相手に自分が依存する関係においては、自分に対する相手の反応が、相手から依存される場面においては、相手に対する自分の反応が、主な言及といえる。

4. 考察と今後の課題

対人関係の様相として、相互依存性の高い関係、相互依存性の低い関係、依存関係、3つの様相に対応する対人場面において、他者について何を言及するか、検討した結果、様相ごとに、他者について言及する際使用するカテゴリが異なること、相互依存性の高い関係にあるとき他者の「心理的側面」を、相互依存性の低い関係にあるとき他者の「客観的情報」を、依存関係にあるとき他者の「社会的相互作用」を、主に言及することが示された。言及内容を認知内容の指標とすると、以上の結果からは、自分と他者との対人関係の様相によって、認知する際に使用するカテゴリが規定されることが示唆される。

ゼミ発表など、課題解決上まわりの人と自分とが必要としあう相互依存性の高い関係にあるとき、課題解決上相手は自分を避けられない、自分も相手を避けられない状況である。このとき、自分にとって相手の行動は自分に向かってくる主体的なものであろう。したがって、人の主体性を顕す、意志・考え・性格特性といった「心理的側面」から相手の行動を説明すると考えられる。

逆に、人混みを歩くなど、課題解決上まわりの人と自分とが互いに必要としない相互依存性の低い関係にあるとき、課題解決上相手は自分を避ける、自分も相手を避けることができる状況である。このとき、自分にとって相手の行動は避けることができる、換言すれば、操作できる操作体であり、物理的対象同様の存在として認知されると思われる。したがって、相手の行動を「客観的情報」から説明すると推察される。

一方、課題遂行が相手次第である、課題解決上自分が相手に依存関係にあるとき、自分は当該課題の解決に向けて相手を避けられないが、相手が自分を避けないかどうかは相手次第である。このとき、自分にとって相手の行動は、自分の働きかけへの反応あるいは自分への評価であり、相互作用の一つとして認知されると思われる。したがって「社会的相互作用」についての情報から相手を説明すると考えられる。

以上の考察から、自分と相手とで形成する関係の様相によって、相手に認知する際に使用するカテゴリが異なること、その様相とは、相手が自分を避けられないか、自分が相手を避けられないかといった他者の不可避性で説明されることが示唆される。

他者に認知する内容が変容するとともに自分に認知する内容も変容するといわれている(e.g., Sullivan, 1953 中井・山口訳 1976)。課題解決上他者との相互依存性の高い関係を形成することで主体的に「心理的側面」をもった

自分が、相互依存性の低い関係を形成することで何も考えず動く物理的存在の自分が、依存関係を形成することでまわりの人々に反応・評価される自分が、自己概念として形成されると考えられる（弓削, 1996）。対人関係の様相及び他者認知内容によって形成される自己概念が変容すると思われる。

逆に、自分がどのような存在であるかの自己概念が、他者をどのように捉え、どのような相互作用や関係を他者に求めるか、自己認知が対人行動や人間関係形成の動機づけに及ぼす効果の問題が考えられる（e.g., 船津, 2006）。この問題は、対人認知と対人行動との関連を検討する、対人認知研究の第三の問題（Hastorf et al., 1958）といえる。課題をおこなう際に意思や考えなど「心理的側面」を自分に認めるとき、同じ課題に取り組む他者に「心理的側面」をみることで、何も考えずに動くいわば物理的存在として自分が感じられるとき他者に「物理的・客観的情報」をみること、まわりから評価される自分をみるとき他者に「社会的相互作用」の情報をみること、これらの他者に認知した内容に応じて、実際に形成されるかは別として、他者にどのような相互作用や関係形成を求めるか規定されるのではないか。

自己概念が他者認知内容及び他者に求める関係の様相に及ぼす効果について、自己概念の変容が他者認知の変容及び他者に求める関係様相の変容から、検討したい。そのために、まずは、このような変容が起きる現象を捉える生態学的研究が必要である。

引用文献

- Asch, S. E. 1946 Forming impressions of personality. *Journal of Abnormal & Social psychology*, **41**, 258-290.
- Baldwin, M. W., Keelan, J. P. R., Fehr, B., Enns, V., & Koh-Rangarajoo, E. 1996 Social-cognitive conceptualization of attachment working models: Availability and accessibility. *Journal of Personality & Social Psychology*, **71**, 94-109.
- Beach, L. & Wertheimer, M. 1961 A free response approach to the study of person perception. *Journal of Abnormal & Social psychology*, **62**, 367-374.
- Bennis, W. G. & Shepard, H. A. 1956 A theory of group development. *Human Relations*, **9**, 415-438.
- Brewer, M. B., & Lui, L. N. 1989 The primacy of age and sex in the structure of person categories. *Social Cognition*, **7**, 262-274.
- Brewer, M. B., Dull, V., & Lui, L. 1981 Perceptions of the elderly: Stereotypes as prototypes. *Journal of Personality & Social Psychology*, **41**, 656-670.
- Campbell, J. D. & Yarrow, M. R. 1961 Perceptual and behavioral correlates of social effectiveness. *Sociometry*, **24**, 1-20.
- 船津 衛 2006 コミュニケーションと社会心理 北樹出版.
- Fiske, S. T., Neuberg, S. L., Beattie, A. E., & Milberg, S. J. 1987 Category-based and attribute-based reactions to others: Some informational conditions of stereotyping and individuating processes. *Journal of Experimental Social Psychology*, **23**, 399-427.
- Hastorf, A. H., Richardson, S. A., & Dornbusch, S. M. 1958 The problem of relevance in the study of person perception. In R. Tagiuri & L. Petrullo (Eds.) *Person perception and interpersonal behavior*. Stanford, CA: Stanford University Press. Pp. 54-62.
- 林 文俊 1978 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科—, **25**, 233-247.
- Heider, F. 1944 Social perception and phenomenal causality. *Psychological Review*, **51**, 358-374.
- Heider, F. 1958 The psychology of interpersonal relations. NY: Wiley & Sons
- 廣田君美 1958 学級構造（発達の分析） 肥田野 直（編）現代教育心理学大系 8 学級社会の心理 中山書店. Pp. 37-72.
- Jones, E. E. & Davis, K. E. 1965 From acts to dispositions: The attribution process in person perception. In L. Berkowitz (Ed.) *Advances in experimental social psychology*, Vol. 2. NY: Academic Press. Pp. 219-266.
- Kelley, H. H. 1967 Attribution theory in social psychology. In D. Levine (Ed.) *Nebraska symposium on motivation*, Vol. 15. Lincoln: University of Nebraska Press. Pp. 192-238.
- 楠見幸子・狩野素朗 1986 青年期における友人関係の概念発達の因子分析的研究 九州大学教育学部紀要（教育心

- 理学部門), 31 (2), 231-238.
- Livesley, w. J. & Bromley, D. B. 1973 *Person perception in childhood and adolescence*. London : Wiley & Sons.
- 村山久美子 1977 自由記述に現われた対人認知の発達的研究 (1) 心理学研究, 48, 1-6.
- Newcomb, T. M. 1960 Varieties of interpersonal attraction. In D. Cartwright & A. Zander (Eds.) *Group dynamics : Research and theory* (2nd ed.) NY: Harper & Row. Pp. 104-119.
- Norman, W. T. 1963 Toward an adequate taxonomy of personality attributes : Replicated factor structure in peer nomination personality ratings. *Journal of Abnormal & Social psychology*, 66, 574-583.
- Oswalt, R. M. 1974 Person perception : subject-determined versus investigator-determined concept. *Journal of Social Psychology*, 94, 281-285.
- Passini, F. T., & Norman, W. T. 1966 A universal conception of personality structure? *Journal of Personality & Social Psychology*, 4, 44-49.
- Peevers, B. H., & Secord, P. F. 1973 Developmental changes in attribution of descriptive concepts to persons. *Journal of Personality & Social Psychology*, 27, 120-128.
- Rosenberg, S., Nelson, C., & Vivekananthan, P. S. 1968 A multidimensional approach to the structure of personality impressions. *Journal of Personality & Social Psychology*, 9, 283-294.
- サリバン H. S. 中井久夫・山口 隆(訳)1976 現代精神医学の概念 みすず書房(Sullivan, H. S. 1953 *Conceptions of modern psychiatry*. NY: Norton & Company)
- Tagiuri, R. 1958 Social preference and its perception. In R. Tagiuri & L. Petrullo (Eds.) *Person perception and interpersonal behavior*. Stanford, CA : Stanford University Press. Pp. 316-336.
- Tjosvold, D. & Farbre, L. I. 1980 Motivation for perspective taking : Effects of interdependence and dependence on interest in learning others' intentions. *Psychological Reports*, 46, 755-765.
- 弓削洋子 1994 対人関係の親密さの変化による対人認知の変容 心理学研究, 65, 355-363.
- 弓削洋子 1996 自他関係の相互依存性が自他認知の相互規定性に及ぼす効果 心理学研究, 67, 177-185.

The Effects of Interpersonal Relation Modalities on Person Perception Categories

Yoko YUGE

This study investigated the possibility that different modalities of interpersonal relation led to different categories of other perception. Fifteen undergraduates and graduates were told descriptions of everyday relations : high interdependent, low interdependent, and dependent. They were asked whether they experienced each type of the relations, and what they thought for each time. Content analysis of their statements indicated that statements about intention, trait, and emotion of other were more frequent at high interdependency, statements disregarding intention of other were more numerous at low interdependency, and mention of self-other interaction were more frequent at dependent relation. It is suggested that the relational unavoidability determines the salient category of other perception.